

みどりの杜俳句会

山肌へ音なく落ち来冬の雨

佐山けさ子

くちなしの実の黄や山の登り口

高橋さみ子

幸せの日や切り干しを姉作る

安田 久子

年末の掃除して我れ元気なり

西 ツル

霜白き山裾シルバーカー押せり

馬場 芳

冬の星斜め東にきらめけり

山崎 才子

冬至柚子浮かべ昼風呂香り良し

高橋 ツ子

大寒や昼の入浴生きかへる

飯野はつ志

青蕨に注連なひ正月飾りかな

飯野 トヨ

久し振り我家に帰り雑煮かな

吉田 愛子

初日の出遠くの木の間より昇る

鈴木 啓子

皆歌ひ笑ひ声湧く新年会

田村 好子

杉山の中紅椿残しあり

落合 七郎

山坂に一つづつ落ち島椿

松本 孚子

オリオンの真下の帰路や急ぎ足

谷内 真里

猫柳穂につく雨の玉光る

関口 侑子

冬晴れの林に響きチェンソー

土屋 厚子

柔らかき茎折れ水仙咲いてをり

初雁 功子

北向きの土手の水仙まだ蕾

千野さき子

稲荷社に子ら賑やかや初詣

野口利江子

幾度もポストのぞきて賀状待つ

関口 真吾

寒明けや小げら声あげ幹つつく

山田 美子

白石短歌会

台風の流木無惨その姿

忘却するなと示唆する如し

温暖化の不安材料聞こゆれど

老の身に暖かき冬有難えし

八人目の孫の桜子の成人式

杳き我娘の思いにふける

どじ自慢歌と英語が得意と云う

周年令の女性に敬服

渡邊美枝子

白石 礼子

渡邊阿里子



人権シリーズ

『同じ言葉でも』

高校に入学した頃、どこの出身かを問われて「東秩父村」と答えると「比企のチベツトか」と言われることがあった。埼玉県あるいは比企郡から見ると東秩父村は西方の山間部で、正に中国から見たチベツトと同じ位置関係にある。なるほどこういう喩えもあるかと妙に感心したものである。

チベツトは単なる地名でこの言葉自体には差別的な意味合いはない。しかし、使い方・受け取り方によっては「田舎者と人を見下して蔑む言葉」として使われ、「自尊心を傷つけられ自己肯定感を失わせる言葉」にもなる。逆に「遠いところから通学するだけでも大変なのに頑張っているな」と思っただけの言葉かもしれない。私は鈍感なせいか地理的な意味合いに感心しただけで、どのような思いで発した言葉なのか考えてもみなかったが、出身を聞いてきた先輩はどのような思いで使ったのであろうか。

同和地区出身の友人は「いまだに出身地を答えるのには抵抗がある。あからさまに差別的な言動をされることこそないが、無言の圧力のようなものを感じて、同和地区を名乗るのには躊躇してしまう。」と言う。

同じ人間なのに生まれた場所によって差別されることが無い社会(国)に早くなつて欲しいものである。そのためには個を重んじること、個を見て判断することが大切である。

イソップ寓話ではアリは働き者として描かれているが、実際のアリは全体の二十パーセントしか働いていないと言われている。「アリは働き者」と捉えるのではなく「アリの中には働き者もそうでないものもいる」と言うように一括りでなく個々に目を向けることが大切なのではないでしょうか。もちろん働いていそうにないアリの良いところにも目を向けながら。

東秩父村人権擁護委員 小林 洋介